きすふれ！
2

きす☆ふれ　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20660232

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, エク霊, モブ霊, ♡喘ぎ, 見せオナ

無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊、モブ霊、♡喘ぎ、見せオナが有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

きす☆ふれ　2

「ん……」
気持ちよさそうに吐息を漏らしながら、営業を終えた相談所で霊幻はエクボと口付け合う。
「えくぼ、もっと……」
心置きなく楽しめる『キスフレ』との睦み合いに、霊幻はうっとりと目を潤ませた。
「……っ、それはいいけどよ、」
くったりとしなだれかかってくる霊幻の色香に抗いながら、これだけは、とエクボは口にする。

「お前、病院予約したか？」

さっ、と気まずそうに霊幻は目を逸らした。
「……その、心の準備が……」
「馬鹿、すぐ病院行けって言っただろうが！」
「だ、だってさあ！」
「お前な、何かの病気かも知れねえんだぞ！？」

ばたん！と勢いよく入り口の扉が開いた。

「師匠、それ本当ですか？」
険しい顔をした茂夫がツカツカと霊幻のデスクに歩み寄る。
「だ、大丈夫だ」
「何がですか。エクボがそんなに心配するなんて、めったなことじゃない」
オロオロと思わず、霊幻が恥ずかしさに視線でエクボに助けを求めてしまう。
それがまた茂夫には面白くない。
「シゲオ、あのな。霊幻は俺様が説得するから……」
「師匠、そんなに悪いの？」

茂夫の顔が青くなる。
「いや、その……」
「師匠、どうして僕に相談してくれなかったんですか。……キスフレのエクボで無いと、信用できないって事ですか？」
ぐい、と霊幻の襟を掴んで。
茂夫は唇を重ね合わせる。
「……僕ともキスフレになりましょう。これで話してくれますね？」
「モ、モブ、」
驚いてまん丸になった霊幻の目が茂夫を凝視する。
「っ、僕が超能力で拘束しながら、エクボに憑依して貰って病院に連行してもいいんですよ！？」
「ま、待て、分かった、話すから。……わ、笑うなよ？」
霊幻は深呼吸する。

「俺……射精したことが無いんだ」

茂夫はぽかんとした。突然ぶっ込まれた下ネタに絶句するが、じわじわと『それは普通にヤバい』という事実が染み込んでくる。
「それは……病院に行った方がいいんじゃないですか？」
「うっ」
「だよな！？シゲオもそう思うよな！？」
「う、うーん……」
煮え切らない霊幻に、茂夫は首を傾げる。病院に行ったりする事にはマメな師であったからこそ、違和感が茂夫を捉えた。
「師匠、何かあるんですね」
確信を持って茂夫が問うと、う、と霊幻が詰まった。
「下品な……話なんだが……」
「気にしないで下さいよ、僕たちキスフレじゃないですか」
「……そうだな。中学生くらいの時かな……何となく、雑談で、……自慰の話になって」
「じい？」
「オナニーだよ。マス掻きの事だ」

霊幻が恥ずかしがって言葉を選ぶので、茂夫には分かりづらくなっていた。
「……その、床ずり、って分かるか？それでしかイけない、って奴がいてさ」
「……あー」
それは茂夫も分かるようだった。うつ伏せになって床に性器を擦り付ける自慰の方法。刺激が強くて、性行でイけなくなるおそれから推奨されてないものだ。
「本人もやめたいんだけど、最初にやったのがソレだったから、他の方法では興奮できない、って言ってて」
「「……」」
エクボと茂夫は難しい顔で傾聴する。
「そしたらさ、他のやつが、最初に見たのがハイヒールを履いた女のポルノだったから、それでしかヌけない、とか。左手でしかイけない、とか言い出して。……最初に覚えた方法って重要だよなあ、って話になって」
うっすらと霊幻の目に涙の膜が張る。
「……俺、医者のおっさんにシゴかれないとイけなくなったら、どうしよう……」
「「……あー……」」
そんな事は無い、とエクボと茂夫は言いたかったが、そうとも言い切れ無かった。
エクボは遠い昔に最初にオカズにしたものにこだわるという、そういう記憶があったし、茂夫は諸事情で、明るい髪の女性をオカズにしないと勃たなかった。
「霊幻、ちょっとききたいんだが……夢精はするのか？」
「えっ」
霊幻は顔を赤らめて、オロオロと足元に目を落とす。
「……する」
小さな声でそう答えた。
その姿の破壊力に茂夫は思わず天を仰いだ。
「じゃあ射精能力には問題がねぇのかもな。問題は……オナニーのやり方、か……？」

「えっ、俺のやり方……間違ってるのか？」
不安そうに霊幻はエクボを見る。
「いや知らねえよ。見た事ねえし」
「ちょ、ちょっとさ……見てくんねえ？もしかしたら、やり方がおかしいのかも」
茂夫は息を呑み、エクボはニタリと笑った。
「いいぜ？見てやるよ。……掃除しやすいところの方がいい。施術室にビニールシートとバスタオル、とかがいいんじゃねえか？」
「ちょ、ちょっとエクボ！」
頷いて準備をし始めた霊幻から隠れて、ヒソヒソと茂夫はエクボに話しかけた。
「こ、こんなの、どうなのかな……師匠の無知につけ込んで、良くないと思う」
「タダでオナニーショー見せてくれるっつうんだからありがたく見ときゃいいだろ。……気が済まねえと病院行かないっぽいし」
う、と茂夫は口ごもる。
「じゅ、準備できたぞ」
「おー、今行くわ」
エクボは話を切り上げて施術室に向かう。
グレースーツの霊幻は緊張した顔で施術台の上に座り、それに向かい合わせてエクボと茂夫はパイプ椅子を広げて座った。
「……霊幻、お前、その服で帰るんだよな？だったら汚れないように全部脱いだ方がいいと思うぜ」
おずおずと股間に手を伸ばした霊幻の余りの無知さに、少し戸惑いながらエクボがアドバイスする。
「そっか」
「師匠……今まで、その、オナニーってどうしてたんですか？」
う、と少し躊躇ってから。
「なんとなく、む、ムラムラした時に……ちょっと触って……でも出ないから、ムズムズしたまま無理矢理意識を逸らしてた」
ぼそぼそと霊幻は伝える。
「……オカズとかどうしてたんです？」
「？おかず？コロッケとか？」

「えええっ！？」
「落ち着け、シゲオ。コロッケでシコってたら相当の特殊さんだ。霊幻、オナニーする時に興奮するために見るポルノを、隠語でオカズって言うんだよ」
「あー……そもそも意識的にシないからなぁ……」
ぱさ、ぱさと無造作に服を脱ぐ霊幻に、何度も茂夫は生ツバを飲む。
「……今、勃起させられんのか？」
「んー、触ってたら、多分勃つから大丈夫だ。ちょっと無理そうだったら、エクボ昨日のやつやってくれよ。胸にちゅーするやつ」
「ぶっ！」
「ちょっとエクボ、キスだけじゃないの？」
動揺するエクボを茂夫がじとりと睨む。
「む、胸にキスしただけだ」
「……………………ふーん」
慌てるエクボと追求しようか迷う茂夫を置いて、霊幻はぎゅむっと性器を握る。
「し、師匠、手元にティッシュ置いておいた方がいいですよ」
「おい、乾いた手で、しかもそんなに強くチンコ握んな」
思わず２人がギョッとして止めた。
「そうなのか」
「本当に知らないんですね……」
箱ティッシュを取りに行く霊幻に茂夫は戸惑う。
「ローション有るか？」
「化粧品の？」
「……有るわけ無いか。じゃあツバでいいだろ。両手に出して、それを陰茎に塗り込め」
「……こう？」
くち♡くち♡と水音が霊幻の手から響く。が。
「そ、それ、気持ちいいんですか？」
指先で探るように陰茎を触るだけの霊幻に、茂夫が戸惑う。
「……少し？」
「……あの、手を丸くして、こすった方が、気持ちいいと思いま

す」
「？？？」
なるほど、オカズとしてＡＶすら見ないのなら、案外自慰のやり方など、憶えようが無いのかもしれない。
茂夫は辺りを見回し、マッサージ用オイルのボトルを掴んだ。
「こうやって、こするんです」
ボトルをしごく真似をする茂夫は、なんだかとても卑猥なジェスチャーをしている気分になって、顔を赤らめた。
「……こう？」
見よう見まねで手を筒にしてしごいた霊幻は、びくんと身体をはねさせた。
「んっ……♡これ、刺激が……っ♡」
「そりゃあオナニーしてんだから……大丈夫か？痛くねえか？」
こく、と夢中で手を動かしながら霊幻は頷く。
「痛くない……っ、ん……♡」
「気持ちいいか？」
「気持ちいい……っ♡」
自分自身の言葉に追い詰められるように、霊幻はぞくぞくした初めての快感を味わう。
「すごっ……♡やば、ぁ……っ♡」
「師匠……」
また、ごくりと茂夫の喉が鳴った。
「こう……強くし過ぎないように、色々試してみるといい、ですよ。裏側をちょっと強く擦ったりとか、」
「こ、う？♡」
「さきっぽの方、くるくるしたりとか……」
「……？」
「こうだよ、こう。カリん所を、指で輪っか作ってねじ回しみたいに回すんだ」
「な、るほど♡……は、ぅ……♡」
つぷりつぷりと性器がカウパーをこぼして、びく、びくと霊幻の身体が震える。
「……長々とやってると痛くなる。そろそろイった方がいい」

「……？ど、やって？♡」
「そうだな……とりあえず先っぽいじめてみるか。こうやって、」
エクボはマッサージオイルボトルの先端を手のひらでこする。
「鈴口、手のひらで責めてみろ」
「こ、う？……っっっっ♡♡♡♡」
びくびくびく、と腰が跳ねて、強い快感に思わず霊幻は手を離してしまう。
「なんか、なんか、おかしいっ！」
「何が」
「ドキドキして、ジンジンして……えっ、これ死なない？」
「死なねーから、我慢して先端こすり続けろ」
おそるおそる霊幻は左手で幹を握って、右手でまた先端をくちゅくちゅ擦り始めた。
「じん♡じん♡って、神経がむずがゆい……っ♡」
「だぁいじょうぶだから」
ぎゅううと霊幻の背中が丸まる。
「なんか、来そ……っ♡だ、だいじょうぶっ？♡」
「大丈夫大丈夫。そのまま続けろ」
「あ、あ、あ、あ♡あ♡あ♡……っあ……♡♡♡♡♡」
びゅるる、と勢いよく射精して、霊幻の手がぐちゅぐちゅになった。
「あ……♡……う……♡」
じっと目を閉じて、射精の余韻を霊幻は必死に逃がす。
気持ちいいのと、解放感と、脱力感でぐちゃぐちゃになっていた。
「しゃ……射精できたじゃねーか！よく頑張ったな霊幻！」
思わずエクボは霊幻の頭を撫でる。
「えらいですよ、師匠！」
「……そ、っかな……」
茂夫にも頭を撫でられて、満更でも無さそうに霊幻ははにかんだ。

※

大学のレポートをパソコンでまとめながらも、夕方の霊幻の痴態を

思い出して、茂夫は悶々としてしまう。
（僕も後で……スッキリしよう）
ううん、と伸びをした時に、スマホが着信した。
「師匠、どうしたんですか？」
明日のシフトのことかな、と出た先で。

『……ぐすっ……』

泣き声が聞こえてきて、茂夫は青くなって立ち上がった。
「師匠、どうしたんですか！待ってて下さい、今すぐ行きます！アパートですか、相談所ですか！？」
慌てて茂夫はスマホを肩で挟みながら財布と鍵をポケットに突っ込む。
『ちがっ……ごめっ……』
「謝らないで下さい！今どこですか！」

『お、おれぇ……っ、見られてないと、イけなくなっちゃった……っ』

「は？」

茂夫は固まった。

続